

「マージナル・マン」理論に関する一考察（I）

国 歳 真 臣

本稿の目的は、現代社会学において、他の理論ほど批判を受けることなく受け入れられてきたマージナル・マン理論を、学説史的に検討することにより、私なりのマージナル・マンの規定をすることにある。そして、この規定を用いて、日本において差別、民族的偏見の対象とされている、日本のマイノリティ——在日朝鮮人のマージナリティを考察してみたい。

このマージナル・マン理論は、パークが、1928年の「米国社会学雑誌」5月号において、「人間の移住とマージナル・マン」を発表して以来、ストーンクイスト、ゴールドバーグ、フェアリス、グリーン、レヴィン、ニューカム、マコーミック等によって発展され修正されてきた。しかし、これらのマージナル・マン概念は現象面や、個人のレベルでのみしかとらえていなかったり、心理学的規定に終わってしまっていて、決して社会的に規定されたものではない。以下では、アメリカ社会学におけるマージナル・マン理論の形成を、学説史的に考察してみたい。

（1）初期のマージナル・マン理論¹⁾

初期のマージナル・マン理論は、パーク²⁾およびストーンクイスト³⁾によるものである。

先づ、パークは、文明と社会発展を進化過程にあるとする一種の進化論的立場を否定して、文化や文明の相違は気候や人種の内的遺伝質の発展よりも、むしろ相異なる人種の敵対または相異なる民族との接触ないし交渉による、というフレデリック・テグガートの「文明激変説」を採用して、文化の発展における人類の移動および人間の移住の重大さを説明している。もちろん、この時、新しく移住してきた民族が持ち込んだ文化によって既存の社会組織は何らかの動揺を受ける。そして隣個人は安定した文化による方向づけを失ってし

まう。しかし、同時に、諸個人は既存の文化と社会組織から解放されてより自由になる。この方向づけの喪失と解放の局面を経ることにより、その人の性格にはある変化が生じ、そこに新しい人格の型が生れる。すなわち、かつて慣習や伝統によって制約されていたエネルギーは解放されて、新しい冒険に対して自由に振舞うようになる。そして、彼は自分の生れ育った世界を「異邦人」の距離をもってみるができるようになる。したがって、解放された個人は、何らかの意味でコスモポリタンとなるのである。パークは、かかるコスモポリタンの例を、ゲットーから解放されたユダヤ人の人格に見出している。そして、パークは、解放されたユダヤ人が二つの異なった決して融合し合わない文化のマージンに在る人、すなわち、マージナル・マンであり、世界最初のコスモポリタンであるとみている。

このパークの概念には、1898年よりベルリン大学において指導を受けた、ジンメルの影響が顕著である。

ジンメルは「異邦人」について次のように規定している。

「放浪ということがある一定の空間からの解放を意味し、それが一定の空間に定位することの反対であるとするならば、異邦人の社会的形態はこの二つの、すなわち放浪と定位との統一として考えられる。異邦人は今日来て明日去る放浪者の如きものでなく、彼は今日来て明日も止まる。しかし、それは決して定住することを意味しない。彼は潜在的な放浪者である。彼は一定の空間的領域内に在るけれども、その空間的領域は、最初から彼の裡に属していないものである。理論的にも実践的にも彼は自由人であり、他人との関係をなんらの偏見を挿むことなく観察することができ、したがって、それに対して最も普遍的客観的な標

準を立てることのできる人である。すなわち、それは異邦人の客観性というべきものである。しかし、この客観性とは、決して事態に参与しない傍観者の立場にあることを意味しない。却って、積極的に特殊な顔でこれに参与することであり、それはある意味で自由ということができる。」⁴⁾

この「異邦人」の概念には、ユダヤ人としてのジンメル自身の姿が投影されているといえる。折原浩氏も指摘する如く、ここでは「異邦人」の合理的知性的な面のみがとりあげられ、感情的情緒的な面が伏せられており、また文化との関連が捨象されている。この二点がパークにおいて改善されている。⁵⁾

パークは、移住によって生ずる「人種的雑種」すなわち、混血児がどういう状況に立つこととなるかを見た。「人種的雑種」は、その両親によって代表される二つの異質な文化の間に同時にはさまれて立たなければならず、二文化の対立を彼自身の内面的葛藤として経験しなければならないことを指摘し、このことから、「人種的雑種」に独特なパーソナリティ——自我の分裂、不安定な行動、強い自己意識、激しい内面的緊張、客観性——が生ずることを述べている。そして、このような「人種的雑種」に典型的にあらわれる独特のパーソナリティの持ち主を、マージナル・マンとパークはよんだ。すなわち、パークのマージナル・マンは「決して完全には滲透し合わず、融合もしない二つの文化と二つの社会のマージンに立つ人間」なのである。

パークによって提出されたこの概念は、彼の弟子ストーンクイストによって更に発展された。⁶⁾

ストーンクイストは、マージナル・マンは複文化的 bi-cultural または多文化的 multi-cultural な状況において生ずるとした。そして、この複文化的または多文化的状況を、(1)文化的差異が人種的、生物学的差異を伴う場合と、(2)文化的差異のみの場合との二つに分けた。⁷⁾ 前者の場合として人種的雑種をあげ、後者の場合として故国の文化から離れ、新しい文化状況に未だ同化しきっていない移民をあげている。

まづ、混血児は、何らかの文化的葛藤と人種的偏見の故に不安定で不確実な性格を有する。そして、常に両方の集団から圧力を受けている。また

両方の集団の文化が二重の同一視型相と分離せられたロイヤリティをつくり出し、自尊心を維持せんとする試みは、彼等を相反する感情をもつ態度へと変えてしまう。すなわち、彼は支配の人種への所属と下位の人種への所属を幾度も置き換えるごとに、優越感と劣等感を交互に所有することになる。その結果、彼の注意は、常に、極度に自分自身に向けられることになる。そして、神経過敏、自己意識、人種意識、劣等感、種々の補償反応といったマージナル・マンに共通な特徴をもつことになる。⁸⁾

次に移民の場合は、第二世代がマージナル・マンになる傾向がある。特に、(1)、子供が母国の文化より早く新文化を摂取する時と、(2)、母国の文化と新文化が鋭く対立する時とである。⁹⁾ ディアスポーラのユダヤ人は、この類型に属する典型的マージナル・マンとされている。

また、移住ではなく、外から異質な文化の侵入を受けて、それに服した民族の中にもマージナル・マンが生ずる。ストーンクイストは、その発生原因として、古い秩序へのロイヤリティと新しい秩序へのロイヤリティの葛藤を指摘している。

要するに、ストーンクイストは、マージナル・マンが二つの人種または文化の接合の所産物であることを示した。マージナル・マンは、両方の人種または文化に結びつけられ、しかも、いずれにも所属しない人間といえる。それゆえに、彼は、この二者の中間に存在するという位置から帰因する種々の不適応の要因であるパーソナリティ特性——反対感情併存、過度の自己意識、落着きのなさ、短気、自己意識の欠如等——を示した。すなわち、彼はマージナル・マンを二重の文化状況において発達するパーソナリティ・タイプとして見それゆえに、マージナル・マンは「パーソナリティの二重性——分裂せられた自我」¹⁰⁾ を示すとしている。

「マージナル・マンの生活において決定的な影響力となるものは、文化の二重性という事実である。」¹¹⁾

しかし、ストーンクイストは、マージナル状況が「集団諸関係の体系」から除外されることを含むという事実を十分に理解していた。それにもかかわらず、この除外ということを強調せず、より心

理学的な諸結果を強調することによって、彼は、マージナル・マンであることが、マージナル状況に存在することを意味するのか、マージナル・パーソナリティ特性を持つものを意味するのかまたは両者を意味するのか混同している。

1940年から1950年にかけての批判は、この点を問題としたのである。

〔注〕

- 1) この初期のマージナル・マン理論については、「運河」第7号、1961年、における折原浩「マージナル・マン——その立場と可能性の問題をめぐるノート」18～130頁が、詳細に検討している。
- 2) Park, R. E. "Human Migration and the Marginal Man", A·J·S., vol 33 (1928) pp881～893
- 3) Stonequist, E. V. "The marginal man"
- 4) Simmel, G. "Soziologie" Leipzig, (1908) S685.
- 5) 折原浩, 前掲論文32頁
- 6) Stonequist, E. V. "The Problem of the marginal Man," A·J·S., vol 41(1935), pp 1～12. Ibid., P 3
- 7) Ibid., P 6
- 8) Ibid., pp 7～8
- 8) Stonequist, E. V. "The Marginal Man", (1937) P217
- 10) Ibid., pp217～218
- 11) Ibid., P 8

(2) 批判と修正——その1

パーク、ストーンクイストの提出したマージナル・マン概念への初期の批判は、この理論の根拠を問題とするのではなく、彼等二人がマージナル・マンとして指摘した人々が、かならずしもマージナル・マンにはならないという現象面からのものであった。この型の批判の第一のものとしては、ゴールドバーグがあげられる。1) 彼は、ストーンクイストが典型的マージナル・マンとみなしたユダヤ人が、マージナル・カルチャーに保護される場合には、マージナル・マンにならないことを主張した。

彼は、ゴールデンワイザーの提出したマージナル・エリアという概念²⁾——二つの文化が重なりあい、したがってこの地域を占めている集団が両方の諸特徴を身におびているような地域——の「非地理学的等価物」としてマージナル・カルチャーの概念を設定し、³⁾ 次のように述べている。

「(1)、もし、いわゆるマージナルな個人が、生

まれた時から二つの文化のマージンに生きるべく条件づけられた場合、(2)、また、彼がプライマリグループにおける他の多くの諸個人と、このような存在および条件づけの過程を共有する場合、(3)、幼年期、少年期を通じて、また、成人に達してからも彼と同じようなマージナルな個人の参加をえている制度的活動に参加しうる場合、(4)、彼の占めているマージナルな地位が、彼の習得した期待や願望を充足する上で大きな障害にはならない場合、この四つの場合には、彼は規定された意味での真のマージナル・マンにはなることなく、マージナル・カルチャーの参加メンバーとなってしまう。すなわち、このマージナル・カルチャーは、このマージナル・マンにとって、ノン・マージナル・カルチャーがノン・マージナル・マンにとって現実的かつ完全であるのと同じく、十分に満足すべきものだからである。」⁴⁾

要するに、ゴールドバーグによれば、文化の機能は諸個人に規範や標準化された行動型相を与えることにあり、このマージナル・カルチャーは十分この機能を果しうることになる。そして、彼はこのようなマージナル・カルチャーを、アメリカに移住してきたユダヤ人の二代目ないし三代目の世代に見出し、「ユダヤ人はマージナル・マンになりがちである」というストーンクイストの主張を否定している。

「その当該の個人にとって、われわれはそれがマージナルではなくて、ノーマルであると記憶せねばならない。彼は他の何も知らない。そのことはより古い移民集団およびより広い異教徒の文化と彼の関係を規定する。彼自身の集団の内部において、ユダヤ人は完全に安定する。そして彼は、その主たる行動をその内部において行う。」⁵⁾

同様な批判は、ミュルダールによってもなされている。⁶⁾ 彼は、アメリカのムラトールが一般ニグロが示すよりも、より極端なマージナル・マンのタイプを示すというストーンクイストの主張に疑問をもった。その理由として、ミュルダールは黒人の兄弟に対してムラトールがもつ多くの利益が彼のフラストレーションの補償となるであろうと指摘している。またワースも、ある意味では、すべての黒人がマージナル・マンであるが、黒人集団内でのムラトールの優位的地位は、彼にマージナ

ル・パースナリティ特性を発展させることから守っていると考えている。7) 他方、ゴロヴェンスキーは、マージナル・マンという用語の使用を人種的「通過者」または、ユダヤと異教徒の間に生まれた子供のような地位にいる人に制限しようとした。8)

これらの批判が、マージナル・マンであるのかまたは、ノン・マージナル・マンであるのかという現象面を問題としたものであるのに対して、W・グリーンは、文化葛藤がマージナル・マンにおいてもっともドラスティックな形をとってあらわれ、かつ文化変動がマージナル・マンにおいてもっとも研究されることができるというストーンクイストの主張を批判した。9)

「パークとストーンクイストの両者が、社会変動の過程は、マージナル・マンの心の中で研究されることが出来ると述べたことは疑わしいように思える。拒絶せられた努力者——ある集団に参加しようとして拒絶せられた人——の心は、もっとも選択的なメカニズムである。彼のパーソナルな問題のより外側の制限は、社会的諸力の全体の一部のみを含んでいる。そして、彼はそのパーソナルな問題を直接に含むところの社会的諸過程のある限られたコントロールのみを持つにすぎない。」¹⁰⁾

更に、グリーンは、マージナル・パースナリティの特性が問題とされる以前に提出されなければならないマージナル状況の特定の面を問題とした。すなわち、自分自身の集団および非マージナル集団への諸個人の志向、そして障壁の概念である。¹¹⁾

- 1) Goldberg, M.M., "A Qualification of the Marginal Man Theory", A.S.R., vol 6, (1941) pp52~58
- 2) Goldenweiser, A., "Cultural Anthropology" in History and Prospects of the Social Sciences, (ed) H. E. Barnes, (1937), P245
- 3) Goldberg, M. M., Ibid., P52
- 4) Ibid., P53
- 5) Ibid., P57
- 6) Myrdal, G., "An American Dilemma: The Negro problem in Modern Democracy" New York and London: Harper & Bros., (1944) pp 699~700
- 7) Wirth, L. and Goldhamer, H., "The Hybrid and the Problem of Miscigenation" in Otto

Kleineberg(ed), "Characteristics of the American Negro" (1944) P340

- 8) Golovensky, D. I., "The Marginal Man Concept: An Analysis and Critique", Social Forces, vol 30, (1952), pp333~339
- 9) Green, A. W., "A Re-examination of the marginal Man Concept", Social Forces, vol 26, (1948) pp167~171
- 10) Ibid., P171
- 11) 障壁 barrier, この考えは後に K. レヴィンによって発展させられた。
Levin, K., "Resolving Social Conflicts., Selected Papers on Group Dgnamics", New York, (1948)

(3) 批判と修正——その2

以上、幾人かの批判を検討したが、最も有効な批判によるマージナル・マン概念の修正は、ディッキークラークも指摘する如く、ケルコッフ、マコーミック、¹⁾アントノブスキー、²⁾マン³⁾の四人によって行われた。上記四人による三つの研究の対象は、アメリカインディアン、アメリカ在住のユダヤ人第二世代、南アフリカの有色人とそれぞれ異ってはいるが、これら三つの研究には重要な類似点が見られる。それは、これら三つの研究がマージナル状況とマージナル・パースナリティの特性の発達の間に関係という中心問題を課題としたことである。そして、このことを経験的とするために、彼等はマージナル・マンの構成概念を心理学的要素と社会学的要素に分類し、分析することが必要であると主張した。そして、同じような客観的状況にいる人々のなかで、心理学的マージナリティの徴候をもっとも示す人を規定することにおいて特に重要なことは、マージナル状況を主観的に規定することである。⁴⁾

まづ、ケルコッフおよびマコーミックは、次の四つの主要素を取り出すことによって、マージナリティの研究に新しい方向を与えた。

- (1), マージナル的地位
 - (2), 自分自身の集団および非マージナル集団への諸個人の態度
 - (3), 多少とも侵入可能な集団間の障壁
 - (4), 以上三つの要因間の相互作用の結果として生じるマージナル・パースナリティ特性
- この場合、次の三つの仮定がおかれている。

「(1), すべてのマージナルな地位は、社会にお

ける異なったレベルの威信をもつ二つの集団間に存在する。(2)、より高い威信集団は、マージナルな地位をより低い威信集団に属するものとしてか、または中間の威信集団に属するものとしてか、そのどちらかに分類する。(3)、個人とより低い威信集団の間には、完全に侵入可能な障壁がある。」⁵⁾

そして、彼等はチャイルドの「イタリア移民の第二世代の研究」を考察することによって、マージナル・マンを「リファレンス・グループとして非成員集団を用いる人」と規定している。⁶⁾ さらに、この規定から彼等は、マージナルな位置とは、その内部においてリファレンス・グループと成員集団間の関係およびそれに伴う心理学的現象が生じがちである社会構造における位置をさすものであると主張している。この主張は、マージナル状況の心理学的面を強調しているといえる。それゆえに、彼等は、マージナル・パースナリティと障壁の関係を次のごとく結論づけている。⁷⁾

- (1)、障壁は諸個人にとって異って存在する。
- (2)、従属集団の成員の支配集団への同一視の傾向は、その個人が直面する障壁の侵透性とともにも増大する。
- (3)、マージナル・パースナリティ特性のもっとも多く生ずるのは、支配集団へ同一視しようとするが、相対的に侵入不可能な障壁に直面する人々である。
- (4)、もし、障壁が個人にとって相対的に侵入可能であるならば、支配集団への同一視はマージナル・パースナリティ特性をほとんど生じさせない。

次に、アントノブスキーの貢献は、マージナル状況の特徴づけにある。彼の規定は、マージナル集団の成員による非マージナル集団のゴールの内化を含んでいる。すなわち、彼はマージナリティを次のごとく規定している。

「私は、次のことによって特徴づけられる社会状況をマージナリティと呼ぶ。

- (1)、二つの文化が絶えず接触している。(2)、それらの内の一方が力によって他方に対して支配的である場合、この支配集団はノン・マージナル・カルチャーである。そして、その成員は、特別に

はもう一方のマージナル・カルチャーによって影響されることはない。(3)、両者の間の障壁は、支配的文化の諸型相を内在化するためにはマージナル・カルチャーの成員にとって、十分に侵入可能なものである。(4)、しかし、全体としては、両方の文化型相は容易に調和されることは不可能である。(5)、ノン・マージナル・カルチャーのゴールを獲得した時、マージナル集団の成員は、より大きな報酬を得ようとして引き寄せられる。(6)、両者間の障壁は、一方の側からの差別と他方の側からの『裏切り』に対する圧力によって堅持される。(7)、マージナリティは、不調和が一代以上持続する時、特別の強さを獲得する。」⁸⁾

アントノブスキーは、この研究において更に一つ重要な貢献をなしている。それは、マージナル状況とは、文化葛藤または文化間のハーモニーの欠如の限界であるということである。このことはストーンクイストが両性間の闘争でさえ一種の文化葛藤であると考えた初期の理論における文化葛藤への強調と一致している。⁹⁾ ただし、彼は、マージナリティの研究は、次の三つの研究とは異なることを提示している。第一に、相対的に独立した社会間の文化の伝播の研究、第二に、相対的に侵入不可能な障壁と接触している集団間の諸関係の研究、第三に、諸個人の相対的に急激な同化の研究。

最後に、マンのマージナル状況の見解をみてみよう。彼は、ケルコッフによってなされた研究を更に検討し、ケルコッフが用いた四つの要素を取りあげてマージナリティを分析した。そして、マージナリティの心理学的特徴として、不安全感 *insecurity feelings* と自己悲哀と過度の感性を提示し、マージナリティ理論の主要問題とみなされる幾つかの仮説を検討している。すなわち、混血児の外観は心理学的マージナリティに結びつけられるのか、ノン・マージナル集団への個人の態度は、この結びつきに何らかの影響をもつのか、外観というものは、ノン・マージナル集団への態度に関連をもつのか、最後に、有色人は心理学的マージナリティにおいて白人とは異なるのか、といったものである。その結果、マンは、次のような結論に達している。すなわち、外観というものは必ずしも直接にはマージナリティには結びつ

けられないこと、外観と白人への志向の間には何らかの結びつきがあることなどである。

要するに、マンのマージナル状況への見解は、本質的にはそれが「欲せられた何かと欲する所のものの否認の所有」を含意しているということである。すなわち、有色人は、彼等が白人集団の成員という利を欲するにもかかわらず、そこに入ることを否定されるがゆえに、マージナル状況にあるということになる。

以上三つの研究は、ゴールドバーグ、ミュルダール等の主張とは異なり、マージナル状況とマージナル・パーソナリティの間の関係について障壁の概念などを導入して検討している。しかし、マコーミック・マンの規定からも明白なごとく、やはり心理学的側面における検討に止まっていて、社会学的側面でのマージナルリティの正確な内容は明確にされずに終わっているように思う。

- 1) Kerckhoff, A. C and McCormick, T. C., "Marginal Status and Marginal Personality", *Social Forces*, vol 34, (1955~56), pp48~55
 - 2) Antonovsky, A., "Toward Refinement of the Marginal Man Concept", *Social Forces*, vol 35, (1956~57) pp57~62
 - 3) Mann, J. W., "Group Relations and the Marginal Personality", *Human Relations*, vol 11, (1948) pp79~92
 - 4) Dickie-Clark, H. F., "The marginal Situation: A Contribution to Marginal Theory"
 - 5) Kerckhoff, A. C., and McCormick, T., *Ibid.*, P55
 - 6) *Ibid.*, P50
- この場合、reference-group を、彼は「その中で個人が acceptance を得る、または維持するべく動機づけられている集団」と規定している。
- 7) *Ibid.*,
 - 8) Antonovsky, A., *Ibid.*, P57
 - 9) Stonequist, E. V., "The Problem of the Marginal Man", A·J·S, vol 39, (1934), P4
 - 10) マンの論文は入手出来なかった為に、ディッキークラークの論文による。

(4) マージナル・マン

私は、マージナル・マンは、次の状況において生ずると規定する。すなわち、未だユニティを持たざる社会がユニティを持った時、その成立したユニティから拒絶された状況——マージナル状況——に置かれた人間は、マージナル・マンである。換言すれば、ある価値体系——規範——によ

って統制された社会において、それを内在化して参与しようとする個人が、その社会体系と完全に一致出来なくて逸脱した状態におかれた時、彼はマージナル・マンになるといえる。

マージナル状況については、ディッキークラークの規定をみる必要がある。彼は次のように規定している。

「マージナル状況とは、格づけにおける不一致が存在するようなハイヤーキカルな状況として規定されうるものである。」¹⁾

更に、彼はこのことを言いかえて、次のように述べている。

「状況のマージナルな特性は、ハイヤーキーによって統制された事態における諸個人の格づけの間での完全な一致や適合からの逸脱した結果として見られうる。」²⁾

この「統制された事態での格づけから逸脱した状態」こそが、ユニティから拒絶された状況といえる。

さて、このマージナル・マンを生ずる状況を更に分類すると、次の二つの場合があげられる。

- (1)、確定しているユニティに入ろうとした場合
- (2)、ユニティから出ようとした場合

前者の例としては、移民があげられる。そしてこの(1)の場合は、更に全体が縮少した場合と拡張した場合とに分けることが出来る。すなわち、全体が拡張した場合には、もとの中心が一つのユニティをなし、新たに加わったものはマージナル状況に存在することになる。また全体が縮少した場合には、当然以前そこに存在した価値体系、信念体系は変化し、また新たな価値体系をもった全体が出来上ることにより、その価値体系から拒絶された一つのマージナル状況が出現する。また(2)のユニティから出ようとした場合の例としては、世代的マージナルがあげられよう。

次に、ユニティの基礎に何を置くかによって、マージナル・マンを形式的に分類することも可能である。例えば、「血の純血」というものを、ユニティの基礎に置くならば、そこには人種的なマージナル・マンが生ずるであろう。また、もし、「行動様式」をその基礎に置いた場合には、「文化的マージナル・マン」が生ずることになる。

更に、リアルなユニティとイディアルなユニテ

ィの中間にある場合にも、マージナル・マンが生ずるといえる。また、これに関連して、等質な時間の中に住んでいるという意識が希薄な時に、マージナル・マンが生ずる。これは情報の伝達速度の相違からくるものである。

以上、マージナル・マンをつくり出すマージンを考えてみると、形式的には次の三つにまとめられる。すなわち、時間的マージン、空間的マージン、質的マージンの三つである。そして、マージナル状況とは、何らかのユニティに個人が参与せんとした時に、時間的、空間的、質的に拒絶された状況といえる。³⁾そして、拒絶された個人はその価値体系を否定するか、またはあくまでもそれに同一化せんとするか、そのどちらかを選ぶ。前者の場合には、その行動型相は攻撃的なものになるであろうし、後者の場合には、パークおよびストーンクイストの提示したパーソナリティ特性をそなえた人間を生ずるであろう。

このように見てくると、マージナル状況の問題は、結局、その社会の価値体系が、どの範囲にまで及ぶのかという問題になる。その意味では、マージンが問題になるのは、実質的には、それが社会的勢力関係に転換された時であるということに

なる。すなわち、一つの価値体系が、ある社会において支配的に（優位的に）確立された時、その価値体系に同一化して行動することが不可能な個人は、その社会体系における自己の位置づけを持たないことになり、マージナル・マンとなる。このことは、結局、マージナル・マンの問題はまた「差別」の問題とみることも出来ることを示している。そこで第(Ⅱ)篇において、マージナル・マン理論がアメリカにおいて成立していく過程に平行したアメリカ社会の変動を見ることにより、マージナル・マン理論がなぜアメリカにおいて展開されたか、更に、マージナル・マンを現実生ぜしめたアメリカ社会のユニティの問題および差別問題を検討してみたい。

1) Dickie-Clark, H.F., "The Marginal Situation : A Contribution to Marginal Theory", *Social Forces*, vol 44 (1966), P367

2) *Ibid.*, PP367~368

3) この場合、いくつかの組み合わせが考えられる。例えば、時間的かつ空間的に拒絶された状況もあれば、時間的にのみ拒絶されたマージナル状況も存在する。

〔附記〕本稿は、昭和43年5月26日第19回関西社会学会での報告を骨子としたものである。